

「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

International University of Health and Welfare

vol. **73**
April 2008



2007年度 国際医療福祉大学 学部・大学院

学位記授与式

卒業生・修了生概要

谷修一学長式辞

卒論あれこれ(言語聴覚学科)

CLOSE-UP卒業生・大学院修了生



CONTENTS

2 2007年度 国際医療福祉大学 学部・大学院 学位記授与式

卒業生・修了生概要
谷修一学長式辞
卒論あれこれ (言語聴覚学科)
CLOSE-UP卒業生・大学院修了生

8 小田原キャンパスレポート 第7回
第2回交流学習会開催 / 「尊徳マラソン」レポート

9 大川キャンパスレポート 第12回
理学療法学科1期生 長期臨床実習スタート / 信頼のおける仲間達と、大好きなバスケットボールと

10 研究最前線 第5回
国際医療福祉大学大学院 竹内孝仁教授
「専門職としての介護—自立支援介護の開拓と実践」

11 Topics & Columns
日本眼科手術学会総会の市民公開講座で高木理事長がパネリスト出演 / ニッセイ同和懇親会を開催 / 2008年度入試状況 / 視機能療法学科臨床実習指導者会議を開催 / 言語聴覚学科臨床実習指導者会議を開催 / 医療経営戦略セミナー開催 / 韓国柳韓 (コハン) 大学・国際医療福祉大学合同セミナー開催 / <コラム> 「私のおすすめ本」第8回 / (福岡リハビリテーション学部 言語聴覚学科長 深浦順一教授) / 小島莊明教授が第36回医療功労賞全国表彰 (海外部門) を受賞 / <コラム> 「サークル紹介」第4回 (等曲部~胡桃の会~) / 看護学科 ホストファミリー 留学生のTさんと過ごした日々 / 看護学科長中西睦子教授 特別講義 「看護の過去・いま・未来」開催 / 鎌倉矩子教授ご退任 / 臨床心理学専攻 開設記念シンポジウム開催 / 乃木坂スクール 2008年度前期開講のご案内 / <コラム> 「私の主張」第8回 「東京マラソン」で思ったこと / (理学療法学科准教授: 松幸伸)

16 施設インフォメーション
<国際医療福祉大学病院> 第52回 「症例検討会」開催
<三田病院> 第2回三田病院一般公開講座開催 / 院内研修会
<熱海病院> 第14回公開講座 / 第11回院内感染防止対策講習会
<山王病院> 人間ドックのお食事をリニューアル
<化研病院> 最新の内視鏡外科手術用統合システムOR-1を設置した専用手術室が完成
<新宿けやき園> 6月の開設にあたって
<福岡国際医療福祉学院> 福岡地区の新プロジェクト「シーサイドももち開発事業」教育施設部分が完成
<高木病院> 小児科の365日24時間救急・診療 / 低身長 (内分泌) で健康教室を開催

20 医療福祉チャンネル774 / IUHW Hot News

IUHW REPORT 大学機関別認証評価の「認定」を受ける

平成16年度からすべての大学は、教育研究水準の向上のため7年以内に一度、認証評価機関が実施する評価が義務付けられました。本学は平成19年度「財団法人日本高等教育評価機構」による評価を受けました。

昨年7月「自己評価報告書」を提出し、9月に評価員による実地調査を受けおりましたが、このたび、3月19日付けで同機構より「本機構が定める大学評価基準を

満たしている」旨の認定を受け、それを証する「認定証」が届きました。

今回の認定は、本学の教育研究活動などの質が公に保証されたことを意味しています。なお、HPで機構からの「評価報告書」ならびに本学の「自己評価報告書」を公表しています。(大学事務局)



博士課程保健医療学専攻修了者
山田和子 (看護学分野)
・論文「乳幼児健康診査を活用した児童虐待の防止に関する研究」(「支援を必要とする美奈子」看護学分野)
関美奈子 (看護学分野)
・論文「代謝循環系外来看護における健康管理手帳の活用」(看護学分野)
村上浩子 (看護学分野)
・論文「記録の読解とその精神科長期在院者の退院経路の解明」(看護学分野)
郭丹 (理学療法学分野)
・論文「理学療法士を用いた簡易関節位測定装置製作の試み」(看護学分野)
佐藤仁 (理学療法学分野)
・論文「運動療法における間接的治療法の検証」(側上肢・手・アプローチによる反対側下肢への影響) (看護学分野)
武田要 (理学療法学分野)
・論文「妊婦の身体負荷量の運動学的解析と軽減方法の検討」(看護学分野)
雷明 (理学療法学分野)
・論文「高齢者および片麻痺患者における転倒リスクの評価に関する研究—歩行時プロファイル反転時間を用いて—」(看護学分野)
山野薫 (理学療法学分野)
・論文「急性期病棟の理学療法部におけるリハビリテーションに関する研究」(看護学分野)
室井健三 (放射線・情報科学分野)
・論文「MRI検査用光センサー式骨密度測定装置の開発」(看護学分野)

高橋清美 (言語聴覚分野)
・論文「統合失調症患者の摂食・嚥下障害に関する研究」
朝原早由 (福祉援助工学分野)
・論文「手動車いすにおける自動走行時の駆動負荷について—三次元動作分析による研究—」
石井佳郎 (福祉援助工学分野)
・論文「膝関節運動伸展運動におけるスクリーニホムムーブメントの動態解析」
梅原貞臣 (医療福祉経営学専攻)
・論文「医薬品が汎用される過程における社会環境因子の影響および地域住民健康ケアに対する薬局薬剤師の役割に関する研究」
GEORGE OCHENG OTIENO (医療福祉経営学分野)
・論文「Development of a Composite Index for Measuring and Benchmarking the Effectiveness of Electronic Medical Records Systems in Hospitals」
高池武治 (医療福祉経営学専攻)
・論文「トランスケアを中心とした地域住民の健康管理と生活習慣病対策としてのセルフメディケーション推進に関する研究」
正木朋也 (医療福祉経営学専攻)
・論文「マクロ経済・保健指標分析とその社会的意義—ヘキサゲルを用いた量的・質的検討—」
山田康夫 (医療福祉経営学専攻)
・論文「茨城県における救急アクセス時間に

池田志登 (医療福祉学分野)
・論文「在宅要介護高齢者の栄養、口腔機能および社会活動に関する研究」
横尾聖子 (医療福祉学分野)
・論文「介護従事者(Smo) (Emotional Intelligence Quotient) S-I値と「チャイコフスキー」(Barnoud)の関係に関する研究」

2007年度卒業生・修了生概要
保健医療学部 582名
看護学部 124名
理学療法学科 99名
作業療法学科 98名
言語聴覚学科 88名
放射線・情報科学科 46名
医療福祉学部 264名
医療経営管理学科 112名
医療福祉学科 152名

修了する留学生
GEORGE OCHENG OTIENO (博士課程 保健医療学専攻 ケニア)
胡 春英 (修士課程 保健医療学専攻 中国)
張冬 (修士課程 保健医療学専攻 中国)
希志朝陽 (修士課程 医療福祉経営学専攻 中国)
OJUCHIMING BOLORMAA (修士課程 医療福祉経営学専攻 モンゴル)
章明 (修士課程 医療福祉経営学専攻 中国)
張章宇 (修士課程 医療福祉経営学専攻 中国)

鈴木陽子 (看護学)
川野美穂 (理学療法学)
中川真理 (作業療法学)
重延綾子 (視能聴覚学)
河井由希子 (放射線・情報科学)
高橋良 (医療経営管理)
野田昭仁 (医療福祉学)

晴天に恵まれた三月七日(金)、国際医療福祉大学・那須アスリーナにおいて、国際医療福祉大学 学部・大学院 学位記授与式が執り行われた。正装に身を包んだ多くの晴れやかな笑顔は、新生活に臨む自信に満ち溢れているように見えた。
多くのご来賓、ご両親、教職員の参列のもと、学部卒業生八四六名(保健医療学部五八二名・医療福祉学部二六四名)、大学院修了生一八九名(修士課程一七〇名・博士課程一九名)の学位記授与式が行われた。

谷学長の式辞の中で、本学開校以来、最年長の七〇歳で卒業生となった古寺哲也さんが紹介されると、出席者から大きな拍手が送られた。
卒業生総代の高橋良さんによる卒業生謝辞、大学院修了生代表山田和子さんによる修了生謝辞、卒業生代表中川真理さんによる卒業記念品贈呈が行われ、式が終了。会場前で在校生たちの祝福を受けた後、それぞれの学位記伝達式に会場を移し、ご両親や恩師が見守る中、一人ひとりに学位記が手渡された。(東京事務所 出版広報室)

コーラス部による校歌「未来への扉」斉唱のあと、谷修一学長より卒業生総代の放射線・情報科学科・高橋良さんに学部学位記が授与された。続いて、開原成允大学院院長より博士課程総代の池田志保子さん、修士課程総代の井上香奈子さんに大学院学位記が授与され、さらに各学科学業最優秀者(右表)に学長賞が授与された。

夫大田原市長、福田富一栃木県知事(荒川勉栃木県保健福祉部長代読)、松村耕三国際医療福祉大学教育後援会会長よりご祝辞をいただいた。





学長式辞(要旨)

谷修一 学長

に対する需要は増えることはあっても、減ることはありません。本学では、医療や福祉の専門職としての教育を行ってきました。「ともに生きる社会を築く」という本学の基本理念からも、その仕事は社会に対する奉仕を基本とし、厳しい自己規律

と強い倫理観、常に温かくやさしい心遣いが求められます。卒業後も、この点を忘れずに努力して、人々の健康と福祉の向上に尽くしていただきたい。

今年の二月末現在で、本学に寄せられた求人数は八千を超える施設から七万人のほりまです。卒業生一人当たり平均八〇倍の求人です。この数字は年々増え、昨年より二二%増えています。これを大学の立場で申し上げると、皆さんの先輩たちの医療や福祉の現場での活躍ぶりが認められた結果であると考えています。本学で一緒に学んだ先輩たちにできることが、皆さんにできない筈はありません。自信と誇りを持って本学を後にしていただきたい。そして皆さんの真剣に歩む姿が後輩たちに希望を与えることを忘れないでいただきたい。

第二、第三の道のりは学生生活より長く、大きく人間を形成していく筈です。自分の人生において、どうすれば幸せになれるか、夢を実現できるか、ということは残念ながら見通せません。現在を精一杯生きること、それが後になって、あの時

が人生の転機であったと分かるというのが真実なのだと思います。ただ、自分の現実を自分の夢や目標に近づける努力を

卒論奮闘記

卒業への最後の難関はやはり卒論。卒業研究で気づいたこと、そして、最後に得たものは……。

卒業までの道は楽なものではなかった。専門科目の勉強に数々のテストやレポート、実技試験……。私は弱音を吐くことがしばしばだった。特にこの一年間は、実習に国試対策、卒業研究と大きな課題が重なり、不器用な私には両立が難しかった。卒業研究をやることを考えたが、先生が最後まで続けるよう励ましてくださった。一緒に研究をした仲間も心強い人で、彼女のおかげでやり遂げることができた。何より、研究の基本も知らず、統計学も大の苦手な私を最後まで丁寧に導いてくださった。

今振り返ると、こんなへちまな私によく乗り越えられたな、と思わずうなづいてしまう。私にとって困難だったこの四年間の課題は、同じ学科のみんなも同様に背負っていた。中には、スマートにこなせる人もいた。しかし、実はぶつかりながらも弱音を吐かず頑張り続けた人もいた。私のように弱音を吐きまくりながら奮闘していた人もいた。私はレポートが上手く書けずうんざりしていた時やテスト勉強に嫌気がさした時、学外実習で一人不安に襲われた時、こうしたみんなの姿を思い浮かべ、自分を奮起させていた。八八八みんなが同じ課題を抱え、それぞれの形で乗り

り越えているのだと思っただけで、一人だけだつたらきつと頑張れなかった。一年生の終わりの頃、ある人がこの学生のまっすぐ頑張り姿を褒めてくださった。二年、三年と過す中で、周りの友人を見ながらその言葉を心から実感した。医療を志す人たちの気質なのか、類は友を呼ぶということなのか。もちろんそれも一つ。しかし、四年になってわかった。先生がそのように私たちを導いてくださったということ。私たちが育ててくださったということ。実習や卒業研究で答えが見つからず悩んでいる時、先生は答えをくれるわけではないが、必ず最後まで導いてくださった。壁にぶつかり前に進めなくなり自分が情けなくなつた時、先生はまずその自分の欠点や弱さに気づくことが大切だと教えてくださった。気づくことができれば必ず克服できるとおっしゃった。不器用でも何とか最後まで自分で乗り越えるよう背中を押してくださった。課題にへこたれそう

するに大きな意味があります。▼皆さんの実りある、悔いのない人生を切望して、私の挨拶とします。

沢山の「ありがとう」を胸に

看護学科 坂部清佳



私は、十年前のあの日、助産師になる決心をしました。そして、本看護学科に入学し、ただ夢に近づきたい一心で駆けてきました。

私は大学四年間で看護師、保健師、助産師になるための学習をしました。学ばば学ぶほど、その難しさを思い知る毎日でした。とりわけ最後の一年間は試験の連続でした。毎日の過密な講義、山のような課題、二十四時間待機の助産実習、三つの国家試験勉強など多忙な毎日、時には挫折そうになり、自分にはできないのではな

に直面して初めて、自分が多くの人に支えられていること、様々なものに生かされているということを知るのだと思います。自分一人の力では、到底たどり着くことはできなかったと思います。今感じる沢山の「ありがとう」を、これからは自分が「助産師」として、一人でも多くの人の心に温かさを届けていくことで返していけたらと思います。

母の言葉が今後の目標

言語聴覚学科 長田健佑



言語聴覚士という職種を知り、この国際医療福祉大学に入学してから四年という月日が経ちました。この大学生活を通して、素晴らしい先生方や、第十期生の友人たちと出会えたことは、今後の人生を豊かにする為の良き糧を得たのではないかと感じています。

在学中、最も印象に残るのは、臨床実習だったと思います。机上

での学習とは異なり、一人の患者様と対面し、アプローチすることの責任感や難しさを知りました。その中でこの職種を生業としたいという思いは益々強くなりました。また関連職種連携実習では各職種の役割、チームの中の言語聴覚士の役割を知る良い経験させていただいたと思います。これから言語聴覚士という職業人となります。以前より母から「皆に慕われる言語聴覚士になさい」と言われ、その言葉の意味が分かってきました。この大学で学んだことを胸に、母の言葉を今後の目標とし、更なる自己研鑽に努めていきたいと思

卒業にあたって

視機能療法学科 黒内慈浩



私は、視機能療法学科の超問題児でした。勉強嫌い、遅刻常習犯、そして何より、医療従事者に

なるにあつた誠意が欠けていました。そんなことではうまくいくはずもなく、初めての臨地実習で現場の厳しさを思い知らされ、挫折してしまいました。一時は視能訓練士の道を諦めようとしていました。そんな時、教員の勧めで、ボランティア活動をする事になりました。はじめは、戸惑うことが多く大変でしたが、高齢者の方や障害者とのふれあいを重ねていくうちに、こちらが誠意を持つて接すれば、気持ちには伝わるということを教えていただき、沢山の良い経験をさせていただきました。このような経験をを通して、再び視能訓練士を目指す気持ちが芽生えてきました。今日まで、諦めずに頑張れたのも、新井田学科長をはじめ、多くの先生方が、時には両親よりも厳しく、そして優しく、私と向き合ってくださいました。ありがとうございました。ありがとうございました。ありがとうございました。ありがとうございました。ありがとうございました。

学科で燃えた運動会で得たもの

医療経営管理学科 木村哲子

この四年間、友達や先生、周りの人達に支えられながら様々な経験を積んできました。特に昨年五月の運動会は、非常に大きな経験



となりました。元々人の上に立つタイプではない私が、学科全学年をまとめて指揮をとる。荷が重く、例年のように好成绩を残せるか、プレッシャーで何度も投げ出したくなりながらも、友達や先生に励まされ、続けました。

「絶対優勝」を合言葉に皆の気持ちが一いつになり、一人ひとり各競技優勝を目指し全力で臨みました。結果は惜しくも準優勝でしたが、「気持ちは優勝だよ！」という話す皆の笑顔は今でもはっきり覚えています。学科のTシャツの制作、販売から応援団のダンスの振り付けまで、何もないところから物事をつくりあげることの難しさややりがいを感じることができ、また自信となりました。

四月から病院で事務職として働きますが、医療経営管理学科で学んだ知識だけでなく、自ら努力し、周りの人達に支えられてこそ物事が成功するこの貴重な体験を生かしていきたいです。

三分野から分野初の修了生

今年は、助産学分野、医療福祉ジャーナリズム分野、視機能療法学分野の三分野で分野初の大学院修了生が巣立ちました。

助産学分野

本学の助産学分野は、これまで学部で行っていた助産師養成を大学院に移行し、さらに、助産師有資格者の研究及び実践力を高める目的で二年前にスタートしました。これは一九四九年の保健師助産師看護師法の制定以来続いてきた専門学校または四年制大学での助産師養成を大学院の二年間で教育するという画期的な出来事で、修了生は六〇年ぶりの新しい助産師教育制度の卒業生にあたります。また、既に臨床経験をもつ助産師が更に自立した助産師としての実践力を修得する有資格者実践コースは本学が初めての試みであり、その点からも本学の卒業生に期待が寄せられています。



修了生一六名(写真)の内訳は、修士論文コース四名、助産師有資格者実践コース六名、助産師国家資格取得コース六名です。助産師

国家資格取得コースは大学院の修了要件三十単位に加えて、助産師国家試験受験科目二四単位を履修して修了します。一四単位の病院・助産所実習というハードなスケジュールを経て、全員見事に国家試験に合格しました。

国内はもとより、海外でも活躍できる人材の育成を目指しており、修了生の中にはタイ・マヒドン大学との連携の下で二か月間、タイでの母子保健実習を経験した学生、ニュージブランド・オタゴ大学で助産師教育や助産師活動の実際を研修してきた学生もいます。

修了生の進路は、看護学校や臨床の産科部長、スタッフとして働きながら学んでいた学生は現職へ戻り、実践コースの有資格者・免許取得者は臨床の場に就職します。時代はこれまでになく、正常出産介助や子育て支援において助産師の力を求めていますので、本学の修了生には大きな期待を寄せています。

医療福祉ジャーナリズム分野



医療福祉ジャーナリズムの修士コースは本学にしかありません。大変ユニークなコースで、そこで学ぶ学生もユニークです。五人の修了生のうち四人が集まって語ってもらいました。

早野真佐子さん(写真右下)は、もともと医療ジャーナリズムの世界に身を置き、「二年前までアメリカの医療事情を伝える仕事をしていたが、日本の情報をつかんでいまま続けることに疑問を持った時、このコースの存在を知りました。ジャーナリズムという分野にとどまらず、医療・福祉を幅広く学べたのが何よりの収穫でした」

山崎恵子さん(写真右上)はフリーアナウンサー・イベントプランナーとして「医療福祉は地域のイベントに欠かせない要素。さらに、エッセイを書く機会があり、文章で伝えることで返ってくる読者の反応に驚き、もっと勉強したいと思いました。これまでは一患者の視点で見ていたことを現場で働く人の視点で見られたことが貴重な体験になりました」

鈴木優子さん(写真左上)は家族が病気になる時、医療者とのやりとりがうまくいかなかった経験から、「フリーライターとして、医療者と患者をつなぐことができなかつたと考えました。医療の世界はゼロからのスタートでした。まず、乃木坂スクールで興味を持ち、次の年に入学しました。特に二年目は先生方に世界を広げていただき、自分のやりたいことがわかった濃い一年間でした」

小川陽子さん(写真左下)はイギリスで接する機会が多くなります。高齢者や片麻痺患者の転倒は大きな社会問題として注目されています。○五年博士課程に進学し、転倒の評価について研究を取り込みました。対象者を実際の生活の場面において評価するため、今までにない簡便な反応時間測定装置を作製し、地域在住の健康高齢者や片麻痺患者を主な対象に転倒評価を行いました。

been unforgettable! Ohawara became a "home away from home". My future plans include working as a lecturer in one of the largest medical training college in Kenya. Kenya Medical Training College, while researching and improving my knowledge in the field of Health Informatics.

日中の架け橋として



霍明さん Huoming (中国) 日本に来る前、中国東北部にある白求恩医科大学付属病院・リハビリテーション科でリハビリテーション治療師として勤務していました。九七年、国際医療福祉大学に入学し、リハビリテーション医学を学ぶ中で、中国において患者さんが自立して生活できるようになりリハビリテーションシステムの改善、人材の育成が必要であると痛感しました。修士課程に進み、じっくり腰を据えて「日中の理学療法士の教育・業務の現状把握および二カ国間でのその現状の比較」について研究に取り組み、修士論文をまとめ、理学療法科学学会の雑誌に掲載されました。また、私の指導教授である丸山仁司先生の著書「臨床運動学」を中国語に訳して、中国で出版するつもりです。

修士修了後、国際医療福祉大学理学療法学科の助手として四年目になる

梅ジコンサルタント・FMのパソナリテイの視点から、「熱海病院が承継された年に熱海に移住しました。この病院が生まれ変わったいく様子を間近に見て、このグループに興味を持ちました。病院が変わってきていることを発信していきたいと思い、医療経営を病院のブランド力という切り口から見たいくチャンスを探りました」

いずれの方からも「医療福祉ジャーナリズムという分野は初めて見た」ということが聞かれ、それぞれの特技を活かしたユニークな研究成果をいずれは本にしたいと話していました。

視機能療法学分野

視機能療法学分野は、四人の修了生を送り出しました。井上香奈子さんと三柴恵美子さんは社会人、鶴羽美里さんと相澤真紀さんは、本学学部の一期生として卒業後すぐ大学院に入学しました。

井上さん(写真)は、本学附属の三田病院の前身、J-T病院に眼科職員として一〇年以上勤められ、本学の附属病院になったのを機会に大学院入学を決意されました。入学後は、新井田孝裕教授、田中靖彦教授の指導を得て二〇〇七年秋には、視能矯正是学芸で二千



視能矯正の指導を得て二〇〇七年秋には、視能矯正是学芸で二千

人の聴衆を前に研究発表を行いました。「最も大変だったのは学会発表の準備でした。大学院の先生方には、使用するスライドや発表原稿、想定質問などを通常の授業時間内に留まらず、発表前日までメールでご助言を頂きました。どんなに訂正しても返される原稿を前に途方に暮れることもしばしばで、仕事との両立は本当に大変でしたが、大きなやりがいを感じ、今ではこれが大学院での一番の思い出となっています。」

井上さんは今後も、視能訓練士として三田病院で活躍されますが、大学院での研究成果を臨床の場へ還元することによって、患者様をはじめお世話になった先生方やスタッフへの感謝の気持ちとしたいと思います。

多彩な留学生

博士課程では、ケニア・中国(2名)、修士課程では、ネパール・モンゴル・中国(8人)など多くの留学生が大学院から巣立っていかれました。

オチエノさん George Ochieng Otieno (ケニア) I came to IUHW to study master of Health Service Management (Health and Welfare Information Systems),

study at IUHW, there have been many unforgettable memories. Studying at IUHW has been the best for me because of the warm environment of the university, the friendliness of the professors and having so many nice colleagues around.

I did my research on "Quality of Healthcare Service Management in Nepal". I would like to go back to my country and serve in the improvement of quality in healthcare. Thank you so much!

自己道を切り開く

今年、大学院を修了された方の中には、すでに社会で大きく活躍されている方も大勢いらっしゃいます。医療福祉を学び実践する弁護士



水野晃さん(医療経営管理学)は、今年五〇歳の弁護士で、傍ら三つの医療法人の理事でもあります。病院の経営に興味を持ち、水巻中正教授の門を叩かれたのです。

「様々な生徒が真剣に学んでおり、先生方もユニークな方やハイレベルな方が多く、当初はついて行けるか心配でしたが、熱心な先生方の指導で、知識が次第に身につけていくのが分かりました。特に、乃

木坂スクールの講師は多士済々で、非常にためになりました。今では、医療法人の理事会に出席しても、医師や会計担当事務等の専門家と同等に話が出来るようになりました。これも大学院での勉強の成果であると思っております」

関西から通学して完成した博士論文



山田和子さん(看護学) 現在は関西の大学の教員をされており、新幹線や飛行機で通いながら5年をかけて論文を完成させました。「大変だったことの一つは仕事をしているために研究にさける時間が少なかったことです。入学した当初は東京で仕事をしていました。在学中に、関西にある大学の教員になり、大学の授業や実習に追われ、研究がなかなか進みませんでした。そんな中、一番の励みになったのは同じ時期に入学した同級生でした。時にはグチを聞いてもらったり、励ましてもらったり、またいろいろ刺激を受けました。論文作成は基本的に一人ですが、大いに励ましてもらいました。また、同級生は、年齢や同じ看護でも専門領域が異なるので、今後とも互いに様々な面でサポートしていきける仲間ができました」

第二回交流学習会開催



平成二〇年二月十九日(火)、第二回となる小田原小田原駅との交流学習会が開催された。交流学習会では全盲擬似体験・高齢者擬似体験・妊婦(マタニティ)擬似体験が行われ、小田原小田原駅職員二〇名と小田原キャンパスの各学科から一八名の学生が参加し、小田原駅構内および小田原駅〜蛸田駅の間を利用して、擬似体験を行った。

全盲擬似体験は、体験用の目隠しを行い、小田原駅構内で体験者と誘導者に分かれて乗車体験を行うというもの。改札口を通り、階段を下り、小田原急線に乗り、蛸田駅で下車し、スロープへ。踏切を渡り、再度電車に乗り、小田原駅まで戻るという行程で行われた。参加した駅職員から、

「下りの階段が非常に怖い」「音を敏感に感じる」

など体験した感想が述べられた。

高齢者擬似体験では、擬似セットを装着し、小田原駅構内での切符購入やコンコースなどでの歩行体験が行われた。この高齢者擬似体験は昨年行われた交流学習会でも希望が多かった体験の一つ。視界を狭くするための器具や錘(おもり)などを装着し、公共の施設での体験となるため、一般乗降者からは「何をやっているのですか」と多くの質問が駅職員や本学学生に寄せられ、交流学習に高い関心が持たれていた。



今回の企画は妊婦(マタニティ)擬似体験。お腹に8kgの錘をつけ、小田原駅構内を利用して擬似体験を行うという

もの。駅職員からは、「子どもが生まれた時に、市での説明会で装具を装着したことはあるが、こんなに長時間体験するのは初めて。足元が見えにくいなど、思ったよりも大変ですね」と率直な意見が出された。

各擬似体験終了後には意見交換会が行われ、体験を通じて感じた感想や今後に役立つ意見が述べられた。

「実際に体験することで、相手の立場に立つた対応ができる」

「これからのために良い経験となった」という意見が多く出され、医療・福祉の道を目指す者として、また駅職員としてこの体験で学んだことを生かしていく貴重な機会となった。

第二回となった今回の交流学習会。昨年参加した学生たちが中心となり、当日の準備を進めてきた。小田原駅職員への説明や当日の誘導など、昨年とは比較にならないほど円滑に進行し、社会の一員として、そして医療従事者として確実な一歩を歩んでいる学生の成長を見ることができた。(学務課 村山京三)

「尊徳マラソン」レポート

REPORT

平成二〇年三月九日(日)、財団法人小田原市体育協会主催の第二回尊徳マラソンが開催された。小田原保健医療学部からは、理学療法学科の昇寛准教授が大会役員を務めるとともに、学生六名と教員二名が競技に参加した。取材して驚かされたのは競技人口の多さである。当日は小田原市を中心に二〇〇〇名のランナーがエントリー。大会の形式は男女・年代別に高校生から四〇歳以上の部が設けられ、距離は一〇kmとハーフマラソンで行われた。参加した学生と教員は全員一〇kmコースにエントリーした。普段から多くのマラソン大会に参加している理学療法学科の榎幸伸准教授をはじめ、同じく理学療法学科の武田要講師、一年生を中心とした理学療法学科の学生六名が午前九時に揃ってスタート。一〇kmの部は七〇分以内にゴールしなければ失格となってしまうタフなレースだったが、それぞれ好タイムでゴールし、安堵の表情を浮かべていた。



来年以降も参加を続けていきたいという教員や学生たち。「陸上部」を立ち上げる機運が高まっているようである。今後の活動に注目したい。

下写真：最後の授業にて。1期生全員集合！



冬の寒さに耐え、キャンパスの桜もようやく蕾をつけはじめている。思えば三年前、期待に胸を膨らませた一期生が入学してきた。彼らのまだあどけない姿の残る顔に、着なれないスーツ姿は今でも印象に残る。その後三年間、先輩がいない中、彼らの直向な行動は本学部の伝統作りの源となり、後輩達の手本となるまでに成長してきた。そしていよいよ、理学療法教育の総仕上げといえる、一期生四八名の長期臨床実習が四月から始まる。

評価実習は無事終了

既に長期臨床実習前の評価実習が昨年の一二月三日から一五日までの二週間で終わり、全員無事に終了した。実習が迫るにつれ、学生達は緊張していることが見て取れるほどであり、学生以上に私達教員も、学

理学療法学科1期生 長期臨床実習スタート



理学療法学科講師 永井良治

部開設以来初の長期臨床実習ということに緊張した。評価実習の目標は①社会人・職業人として適切な態度がとれる。②必要な情報を収集することができる。③疾患と障害像に応じて適切な検査・測定項目を選択することができる。④検査・測定を適切に実施できる。⑤検査・測定の結果から問題点の抽出ができることである。実習を終えて学生達は、実習前に掲げた目標以外にも、患者さんとのコミュニケーション能力や大学の勉強とは違う問題解決能力など多くの課題が残っており、もっと勉強しなくてはならないことに全員が気づいたに違いない。しかしながら、実習の総括として学内で行われた症例報告会では、質問も多く、活発なやりとりが行われ、顔つきも変わり実習前には想像もつかないくらい成長した姿を見ることができた。

医療人になる自覚をもって、長期臨床実習に行ってください！

「患者さんのために頑張ろう」とよく私は三年生に言う。この言葉は、患者さんの痛みや痺れは分からないが、「気持ち」を共有できる。気持ちをあずけられる「理学療法士」になってもいいという思いからである。我々にとって患者さんは「one of them」という存在かもしれないが、患者さんにとっては我々が唯一の先生である。実習に合格すること、単位を取ることがゴールではない。一人ひとりの患者さんの様子をよく観

察してもらいたい。長期臨床実習は四月から開始され、八週間の実習が二回行われる。目標は、①問題点を抽出し、適切な治療目的、治療計画を作成することができる。②対象者に基本的な理学療法が行え、対象者の変化に応じて治療計画を修正することができる。③チームの一員として、その役割や責務を理解することができることをあげている。実習に

信頼のおける仲間達と、大好きなバスケットボールと

理学療法学科三年 木村尚道

バスケットボール部はマネージャー三名を含め、部員四名が所属し、サークルから部に昇格して約一年の、できたてホヤホヤの団体だ。昨年度から大学内に体育館ができ、週に三〜四回練習することができるようになり、近辺の社会人大会にも積極的に出場するようになった。しかし、夜遅くまで大学に残ってレポートを書いたり、勉強をしなければならぬので、全員揃った練習はとても難しい。一ヶ月以上も練習に参加できないというメンバーもいる。それでも、練習に参加できない事情は他のメンバーも十分理解しており、久しぶりにメンバーが揃う時は、皆で和気藹々と練習している。この部の第一のモットーは、楽しくバスケットボールをすること。部に昇格したからといって、皆がイメージするようなきつい練習をするわけではない。勝ち負けには拘らず、まずは大好きなバスケットボールを楽しんでほしいと考えている。自然と結果はいいってくる。ここが、他の大学の部とは違う、この大学だからこそ、このメンバーだからこその特徴ではないかと思う。



帝京大学福岡医療技術学部との親善試合



祝・有明カップ準優勝！先輩お疲れ様でした



右から櫻井よしこさん、高木理事長

日本眼科手術学会総会の 市民公開講座で高木理事長が パネリスト出演

二〇〇八年二月三日、パシフィコ横浜で、第三二回日本眼科手術学会総会の市民講座が開催され、高木邦格理事長がパネリストとして出演した。本学会は山王病院眼科の顧問でもある清水公也先生が会長を務めており、公開講座ではジャーナリストの櫻井よしこさんを講師として迎え、「医師不足と混合診療」をテーマに討論が行われた。医師不足は診療科や地域の偏在が原因だという結論のもと、これまで国が行ってきた医師供給抑制策が昨今の深刻な医師不足の原因となっていること、医師の絶対数が足りない以上教育面での早急な対応策が必要

本学内のレストラン「オーブ」において、岡崎名誉会長をお迎えし、谷修一本学学長、開原成允本学大学院院長、北島政樹本学副学長（三田病院院長）、各学部（科）長及び、現在奨学金を



ニッセイ同和損害保険株式会 社岡崎名誉会長と奨学生との 懇親会を開催

二月二日（火）午後〇時一五分より大田原本校において、ニッセイ同和損害保険株式会社と奨学生との懇親会が開催されました。この奨学金制度は、平成九年に同社のご厚意により設立されました。懇親会は本制度の設立にお骨折りいただいた岡崎真雄名誉会長（当時社長）などをお招きし、平成一〇年度から毎年開催されているもので、重ねて今回が九回目となりました。

三月一五日の一般入試後期日程の最終日をもって、本学の二〇〇八年度入学試験が全て終了した。二〇〇八年度入試は、A〇入試実施学科の増加、大学入試センター試験利用入試後期の導入、一般入試前期地方試験場の拡充、選抜方法・入試科目等の変更、入学検定料割引制度の導入等、受験者にとってはより受験の機会、入学の可能性を広げる環境を整えての実施であったが、少子化の進行に伴う大学全入時代の到来に加え、大学受験全体におけるトレンドとしての医療福祉系統離れや、受験者の都心部志向、国公立志向等の影響もあり、最終的な志願者数は、六三三三名にとどまった。

二〇〇八年度入試状況

受けている学生二十名等が出席しました。懇親会では、谷学長から歓迎の辞が述べられ、続いて岡崎名誉会長より、「多くの奨学生が各方面で活躍されており、皆さんも精一杯努力されて、立派な医療人となり活躍されるよう期待しています」との激励をいただきました。奨学生からは奨学金に対する御礼と近況報告を兼ねた挨拶がありました。特に、卒業間近の四年生からは、卒業後の進路や就職予定先、今後の抱負などについての報告もあり、これに対して、岡崎名誉会長がアドバイスされる場面もあるなど、終始和気藹々の雰囲気の中での有意義な懇親会となりました。最後は出席者全員での記念写真となりました。（本校学生課）

◆2008年度入試 学部別志願者数

学部	定員	志願者数（ ）は昨年度
保健医療	480名	3041名（3125名）
医療福祉	240名※	411名（491名）
薬	180名	529名（611名）
小田原保健医療	130名	1742名（2369名）
福岡リハビリテーション	160名	620名（746名）
合計	1190名	6343名（7342名）

※医療福祉学科 編入学試験の募集定員は除く。

医療福祉に対する熱い思いを携えて本学を受験し、見事に合格を手にした受験者の方々は、本学での新たな生活に向け、希望と期待に胸を膨らませていることであろう。医療福祉分野の充実が早急の課題となっている現代社会において、各専門職の果たす役割は大きい。医療福祉分野のエキスパートとしてチーム医療を支え、中核を担う人材となることを目指し、日々学んでいく。学生募集活動は昨年度に引き続き、さらに厳しい局面が予想される。現状を打開するためにも、臨床実習施設の豊富さや国家試験合格率高さ、それらに裏打ちされる就職への強さ等、本学の良さや特色を前面に打ち出し、大学全体として学生募集に取り組んでいきたい。（入試センター入試課）

研究最前線

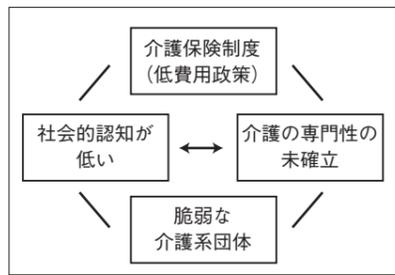
第六回

専門職としての介護— 自立支援介護の開拓と実践

竹内孝仁 教授 国際医療福祉大学大学院

本学で行われている優れた研究を紹介するこのコーナー。今回は大学院医療福祉分野の竹内孝仁教授の研究を紹介いたします。離職問題と自立支援介護

最近の「介護職の離職問題」を関連資料をもとに分析し、雑誌『介護保険情報』（社会保険研究所）に「介護再生」を連載中です（平成一九年九月号より）。ここでは、介護離れの根本的な要因に目を向けることにより、現在の介護が抱える問題点や限界を明らかにし、今後の介護のべき道を示している。



介護離れの要因

介護離れを生む大まかな要因は次の表のようになる。ここからさらに、入所施設で働く介護福祉士を念頭に、離職の実態を詳しく見ていくと、その多くが一年以内の「早期退職者」であり、仕事に専門性を感じないゆえの「絶望型の離職」であることがわかる。さらにもうひとつの原因は、ケアをめぐる職場での人間関係である。

介護離れを生む大まかな要因は次の表のようになる。ここからさらに、入所施設で働く介護福祉士を念頭に、離職の実態を詳しく見ていくと、その多くが一年以内の「早期退職者」であり、仕事に専門性を感じないゆえの「絶望型の離職」であることがわかる。さらにもうひとつの原因は、ケアをめぐる職場での人間関係である。

平成18年度 (H19/2集計)		
施設名	介護度	オムツ率
奈良S	3.6	2.8%
兵庫R	3.65	5.7%
宮城S	4	6.3%
愛知D	3.8	10.0%
大阪K	3.14	10.0%
和歌山H	2	10.6%
北海道S	2.8	11.8%
岐阜N	3.43	12.0%
北海道K	3.44	12.1%
福井K	3.75	12.5%

この講習会は平成一六年度に始まり、一〇〇〜二〇〇の特養ホームが参加し（各施設一名）、年間六回、一泊二日の継続研修を行っている。内容は徹底した自立支援介護である。次の表は研修終了時の日中オムツ使用率（低利用率）ベストテン施設である。特養ホームの平均像が六〇〜七〇％であることを考えると、驚くべき数字である。

この講習会は平成一六年度に始まり、一〇〇〜二〇〇の特養ホームが参加し（各施設一名）、年間六回、一泊二日の継続研修を行っている。内容は徹底した自立支援介護である。次の表は研修終了時の日中オムツ使用率（低利用率）ベストテン施設である。特養ホームの平均像が六〇〜七〇％であることを考えると、驚くべき数字である。

こうした介護離れに歯止めをかけるため、早急を目指すものは「介護の専門性」であり、さらにそれは、「自立支援介護」であることは言うまでもない。ここでは全国老協主催の「介護力向上講習会」—おむつアンダー30（おむつ利用者を入所者の30%以下にするとの意味）から、「自立支援介護」が到達している先端部を紹介したい。

悩みを持つ人の回答の中で最も多い項目が「ケアの方法等について意見交換が不十分である」ということからわかるように、これは、「ケアの質」「ケアの質を中心とした組織体制」の問題であり、介護の現場において、チームとして機能すべき「介護のあり方」への理念や方針が不在であることを示している。

ケア理論の提唱

また、竹内教授はかねてより「認知症を治すケア理論」を各地の講演などで述べてこられ、さらに、その内容を「認知症のケア—認知症を治す理論と実際」（年友企画）として出版した。この理論はこの数年、様々な施設で実践され、平成一九年一二月、その実践事例をまとめた「認知症を治す事例集1&2」（年友企画）が出版されている。

- ① 理論的なケアを行うこと
- ② 認知症は治せると確信すること
- ③ 認知症は脳の病気という誤った考えを棄てること
- ④ 「認知」という精神の働きを正確に理解しておくこと
- ⑤ 認知障害はいろいろな原因で生じる
- ⑥ 認知症の症状（異常行動）には6つのタイプがあること
- ⑦ アセスメントをしっかり行うこと
- ⑧ ケアには4つの原則がある

- さらに、⑥の症状の6タイプとして、
- ① 身体不調型—「興奮」と表現される行動
- ② 環境不適応型—さまざま「拒否」
- ③ 知的衰退型—「迷子」
- ④ 葛藤型—興奮、粗暴、物集め、人集め、異食
- ⑤ 遊離型—「終日ぼんやり」
- ⑥ 帰郷型—古きよき時代への帰郷が挙げられている。



教員と院生とが一体となった研究活動

竹内教授が目指す「自立支援介護」を実現するには、先に紹介した「介護力向上講習会」などの「実験場」から多くの経験を集積して一定の知見に到達しなければならぬ。そのためには、多くの研究活動が必要となるが、実際のところ、介護の世界ではこうした学術的な研究はほとんど皆無と言っている状態であるといえる。

「私のゼミには介護及びケアマネジメント関係の院生が多数在学している中で、彼らにそれぞれテーマを持ってもらい、指導教員と院生とが一体となって幅広い領域に研究活動を展開中です。その一端として平成一九年度に、博士二名、修士八名が誕生しました」（竹内教授）

こうした本学の研究活動が多くの成果を上げ、専門職としての介護職が確立されるのが望まれている。

（東京事務所出版広報室 金井雅之）

視機能療法学科臨地実習指導者会議を開催



二月二二日、東京サテライトキャンパスにて、視機能療法学科の第四回臨地実習指導者会議が開催された。当日は、岩手県から長野県まで十六施設から十八人の実習指導者にお集まりいただいた。谷修一学長による挨拶の後、新井田孝裕学長より本学の臨地実習に向けての学内での様々な取り組みが報告された。引き続き、昨年度、実習指導者から提起された問題点を基に実施した学生へのアンケート調査の結果を報告した。一方、日本大学付属板橋病院の福山千代美先生から、実習施設側のアンケート調査の報告があり、養成校と施設側の双方からそれぞれの立場で様々な意見が出され、大変有意義な会議となった。施設側からは、人間性を磨く、会話力、人との対応力などを身につける教育をしてほしいという要望が多く寄せられ、医療職に必要なコミュニケーション能力をさらに高めていく努力が必要であることを実感した。今回の会議で得られた貴重なご意見を基に、今後の臨地実習の改善に向け、努力していきたい。

(視機能療法学科講師 三柴恵美子)

言語聴覚学科臨床実習指導者会議を開催



言語聴覚学科では、三月一日、実習指導者会議を開催した。過去最高の五七施設が出席する盛況な会議となった。臨床実習は、一年次の施設見学・会話体験、二年次の臨床見学、三年次の評価実習、四年次の総合実習から成る。総合実習は、言語聴覚センターでの学内実習と実習施設での学外実習があり、学内実習では、学科教員指導により基本となる臨床思考能力の獲得を目指し、学外実習では知識・技術の応用能力の獲得を目指す。教員が自ら担当する症例を通して、直接臨床の基本を指導する学内実習は、本学科が誇る最も特徴的な実習形態であるが、応用を担う学外実習と合わせて臨床実習は実を結ぶものであり、実習施設との相互理解、連携体制の強化は極めて重要である。本年度は成人領域における摂食嚥下リハビリテーションに焦点を絞り、授業や学内実習で指導する内容と実習施設で指導して欲しい内容を率直に示してディスカッションを行った。今後はさらに連携を強化し、言語聴覚士養成のコアカリキュラム確立に取り組むことが急務である。

(言語聴覚学科准教授 森田秋子)

「医療経営戦略セミナー」開催



医療経営に関する新しい研究成果を地域に還元する医療経営管理学科主催の「医療経営戦略セミナー」(写真)が三月一日、栃木県宇都宮市のときぎ福祉プラザで開かれた。一〇回の節目となる今回は、学科長の高橋泰教授が「二〇〇八年度診療報酬改定が今後の病院経営に及ぼす影響」と題して講演した。高橋教授は、勤務医対策に一五〇〇億円を投じた意匠や七五歳以上の後期高齢者の狙いなど、病床削減、機能分化、地域を守るという医療政策の大きな流れの中で今回の改定が持つ意味を解説。専門のDPC(包括払い制度)では現在導入されている高度先進病院と、基準の異なるDPCを地域一般病院用に適用、「二階建て」の病病連携を提唱しているが、今回の改定で方向性が見えてきたと指摘した。大西正利准教授は経営に役立つ具体的な内容をコメント。関心の高いテーマだけに、雨模様にもかかわらず一〇〇人を超す医療関係者が詰め掛け、「将来の医療の進む方向が良くわかった」と、熱心に聞き入っていた。

(医療経営管理学科教授 丸木一成)

韓国柳韓(ユハン)大学・国際医療福祉大学合同セミナー開催



二月二七日、東京サテライトキャンパスで、本学の竹内孝仁教授(NPO法人パワーリハビリテーション研究会会長)を講師に、韓国柳韓(ユハン)大学との合同セミナーを開催した。「パワーリハビリテーションの理論と技術」と題し、柳韓大学医務行政科教授でもある本学の南商堯(ナム・サンヨウ)客員教授が通訳を務め、韓国老人病院協会と韓国作業療法協会による研究チームと本学の大学院生・教職員が受講した。韓国では二〇〇八年から介護保険制度が実施されることから、動作と体力の改善と共に、パーキンソン病、うつ病、認知症に対しても効果をもたらすパワーリハビリテーションへの関心が高まってきている。この合同セミナーはそうした機会をとらえて企画されたもので、講義後は、発病後どれくらいの期間パワーリハビリテーションを行えばよいのか、在宅になつた場合にはどのようにケアをするのかが、活発な質疑が行われ、将来にわたる友好関係と連携をいっそう発展させるものとなった。

(大学院東京SC 島山恵美子)

私のおすすめ

福岡リハビリテーション学部 言語聴覚学科長 深浦順一教授

潜水服は蝶の夢を見る
ジャン・ドミニック・ポビー著・河野万里子訳 (一九九八年 講談社)

昨年一〇月に、アスミック・エースという映画配給会社から言語聴覚士のことを知りたいと連絡があった。脳出血でロケットイン・シンドロームとなった主人公が、唯一残ったコミュニケーション手段である左目の瞬きのみで書き上げた「潜水服は蝶の夢を見る」という本を原作にした映画を公開することになった。その瞬きによるコミュニケーション手段の訓練をしたのが言語聴覚士(原作中では言語療法士という古い名称)であり、その仕事について教えてい

ただきたいということであった。早速本を探し、購入して読んでみた。短い章立てで、潜水服の中にいるように外界と閉ざされた中で、過去の出来事、家族や友人のこと、病院の中の出来事など、自由な発想の中で皮肉を交えながら書かれた文章を一気に読むことができた。このような重度の身体的障害がありながら、本の中で悲惨さを感じないのは何故だろう。おそらく、彼が新たなコミュニケーション手段を獲得し、彼の頭の中にある自由な発想を外に表現することができるようになり、本を書くという作業が彼に生きる力を与え、その力・希望が文章の中に現れているからであろう。

この本を原作とした映画は、カンヌ映画祭監督賞、ゴールデン・グローブ賞監督賞・外国語映画賞など多数の映画賞を受賞した。原作を忠実に再現し、彼のおかれた環境と新たなコミュニケーション手段を獲得して本を書くことに挑戦するジャン・ドミニック・ポビーそしてそれを支える人々がよく描かれており、原作を読まると同時に、映画もご覧になることをお勧めする。



©Pathe Renn Production, France 3 Cinema, CCRAV 2007
オフィシャルサイト <http://chou-no-yume.com/>



小島莊明教授が第三六回医療功労賞全国表彰(海外部門)を受賞



本学国際交流センター長・基礎医学研究センター長の小島莊明教授が「第三六回医療功労賞」(読売新聞社主催、厚生労働省など後援、エーザイ協賛)の全国表彰(海外部門)に選ばれました。

この賞は、厳しい環境の中で顕著な功績を残した医療関係者を表彰するもので、小島教授は寄生虫やマラリア対策として、タイに設置された「国際寄生虫対策アジアセンター」のプロジェクトを推進するために、タイとその周辺で五年間にわたって、清潔な環境を保つ衛生教育の必要性を訴え続けたことが認められました。

また、この受賞は二月二九日付の読売新聞でも先生の写真入りで取り上げられました。日頃、国際的な感染症の問題や医療にかかわる者の心構えなどを学生に教えている先生は、その中で「途上国の子どものため自分ができることがあると、日本の若い人たちに気付いてほしい」と話しています。

(東京事務所出版広報室 金井雅之)

サークル紹介 第四回 箏曲部「胡桃の会」

医療福祉学部医療福祉学科三年 豊田諭美



「いやっ」独特のかけ声から演奏が始まる。古くから伝わる邦楽。琴と三味線。その歴史は長く、今でも私達に親しまれ、そして引き継がれています。箏曲部「胡桃の会」は、他の部活動と比べると、部員は少ないのですが、だからこそ、お互いを深く知ることができ、とてもアットホームな雰囲気の中で活動をしています。

部員は、大学に入学してから初めて邦楽器をするという人が大半ですが、大学に教えるにきてくださる待井玉絵琴先生のご指導の下、皆すぐに弾けるようになります。こういう私も、二年生から入部して三味線に初めて触れ、今では、沢山の曲を演奏できるようになりました。これも待井先生の分かりやすく、丁寧な指導あつてのことだと思います。

活動内容は、クリスマス会や忘年会、地域のイベントなどに参加し演奏させてほしいです。こうした活動を通して地域と学生との交流を深められ、福祉を学ぶ者として大切な「人と人とのふれあい」を沢山持つことができています。部活という機会を通じて、私達は学校で学ぶこと以外に、色々な考え方や見方ができるようになりました。

最後になりましたが、部活を通じて、私は沢山のことを学ぶことができました。部活を決めかねている方は、是非箏曲部に入部してみたいかがでしょうか。





臨床心理学専攻 開設記念シンポジウム開催

二〇〇七年四月に開設した大学院臨床心理学専攻では、二〇〇八年二月二五日、東京サテライトキャンパスホールにて、開設記念シンポジウム『臨床心理学の営み』を開催した。

波田野茂幸准教授の総合司会のもと、開原成允大学院院長のビデオ挨拶から始まった。その中で、医療福祉系の本学が本専攻を開設した理由として、臨床心理士が今後ますます医療の世界に活躍の場を広げていくと予想されていることが語られ、続いて挨拶した安島智子専攻主任・教授も、「医療の世界こそ臨床心理士の活躍の場」という状況を事例を挙げて紹介した。

シンポジウムでは、小島秀吾准教授・難波愛准教授の司会のもと、まず、安島智子専攻主任・教授が「心理臨床のプロ

ら二年後の春、コウノトリの恵みに預かり、昨年の一二月の末、玉のようなおとこの子を出産しました。

Tさんの母親は、娘のケアと孫の顔を早く見たいと願って出国手続きをしたのですが、国の事情によりやっつと二月の中旬にTさんのもとに来ることができました。その間私は、文化の違いに戸惑いながらも、ホストファミリーとして、人間としてできる限りのケアをするのが務めと思い、Tさんがマタニティブルーにならないように、側面からケアするのを楽しんでおりました。

三月に卒業式を終えて三人で帰国するまで、陰ながら後押しをして「日本での留学は本当に良かった。子どもは日本に留学させたい」と思ってくれた日があることを願いつつ日々を送っています。

「出会い」ということは、私の大好きなことばの一つです。いろいろな出会いで、人は成長し合えるものと思っております。若い二人から、そして二人を取りまくたくさんの方々からメッセージと示唆を頂き、私の固まりかかっていた脳細胞を柔らかくしていただきました。

この若い家族の幸せは、大田原市をはじめとして、国際医療福祉大学およびたくさんの先生方や国際医療福祉大学病院のあたたかい配慮以外の何ものでもないと感じております。

Tさんと共に過ごしたことで、私自身日本の文化の良さを再確認し、充実した日々を送ることができました。ホストファミリーとしてのチャンスを与えていただいたことに心から感謝しております。

(看護学科教授 坂主リツ)

セスと変容の深層」と題して、心理療法の来談者が人生の過程を発見的に歩むのを援助することと定義して、治療を成り立たせる治療者の役割などを語った。

続いて、岡野憲一郎教授が『精神科医療と心理臨床の融合』と題して、自らの米国での体験を基に、日米における臨床心理士と精神科医の役割の違いを紹介し、医師と連携できる臨床心理士を育成することが本専攻の目的であると強調した。

さらに、亀口憲治客員教授が『システムとしての「心理臨床の営み」』と題して、ひとつの原理だけでは対応できない心理臨床について、バランス調整の役割やハイブリッド性などの考え方を示すなど、心理臨床のシステム論を展開した。

指定討論では、和田秀樹教授が本専攻を他分野からも入れる臨床心理のトレーニングの場にしたという構想を述べ、加えて、「高齢者とその家族の心理臨床」が今日的なテーマになっていることを訴えた。

パネルディスカッションでは、和田秀樹教授が各講演を総括し、最後はフロアとの質疑応答の時間が設けられた。来場者は自身の仕事や研究からの疑問や興味について先生方の意見を求めていた。

当日は今冬一番の冷え込みが報じられる中、学生や医療福祉施設関係者などおよそ一〇〇名が詰めかけ、熱気あふれる会場となった。この分野に対する関心の高さに改めて手応えを感じ、二年目のさらなる飛躍のステップとなる記念シンポジウムになった。

(東京事務所出版広報室 金井雅之)

講座名	コーディネーター	開講曜日・時間	授業料
# 01 2025年の在宅医療・福祉の在り方を考える	高橋泰 岡村世里奈	月曜 18:30~20:30	全13回 36,000円
# 02 医療情報システム概論 —基礎から最近の話題まで—	開原成允	火曜 18:00~19:30	全12回 36,000円
# 03 ケアマネジメント・認知症ケア・介護予防のための講座	竹内孝仁	水曜 18:30~21:00	全12回 36,000円
# 04 CRCに必要な最新の知識とスキル	中野重行	水曜(一部土曜) 18:30~20:00	全12回36,000円 各コース全4回15,000円
# 05 病院のIT化と経営戦略への応用	開原成允 外山比南子 長谷川高志	水曜 18:30~20:30	全14回50,000円
# 06 動作分析体験コース	山本澄子	隔週水曜 18:30~20:30	全9回48,000円
# 07 住環境整備の手法を探る —疾患別の住環境整備を中心に—	野村歎	木曜 18:30~20:00	全13回30,000円
# 08 日本の医療は再生できるか —医療・福祉ジャーナリズムの視点からの検証—	丸木一成	金曜 18:30~21:00	全12回36,000円 3回選択10,000円 6回選択20,000円
# 09 創薬育業医療チーム【特に、CRA】 業務の実際と留意事項①	野口隆志	金曜 18:30~20:30	全12回36,000円
# 10 診療情報管理講座 中級A・上級	鳥羽克子	中級A 第4土曜 13:00~17:50 上級 第3土曜 13:00~17:50	中級A 全6回36,000円 上級 全6回36,000円
# e-1 患者の声を医療に生かす	開原成允 松下年子	インターネットによる VOD(ビデオ講義)	40分×15回 5,000円
# e-2 ボランティア最前線	大石剛史 大熊由紀子		45分×26回 8,000円
# e-3 呼吸理学療法対象者に対する評価とアプローチ	丸山仁司		40分×14回 15,000円
# e-4 心臓理学療法士をめざして	丸山仁司		60分×14回 15,000円
# e-5 医学用語初歩	開原成允		45分×11回 15,000円

乃木坂スクール 二〇〇八年度前期開講のご案内

大学院では、毎年授業の一部を広く一般の方々にも、公開講座「乃木坂スクール」として開講しています。

今年度も、医療・福祉関係を中心に、一〇講座を開講します(左表をご参照ください)。毎回、テーマに合わせた著名なゲスト講師をお招きし、豊富な経験とたゆまぬ研鑽から得た知識の一端を、時に質疑応答を交えてご講義いただきます。

また、インターネット同時中継も始めましたので、当日どうしても来れないという方は、インターネットの環境さえあれば一週間の間はいつでも視聴できます。

院生の方は、授業科目としての登録は勿論、ほとんどの講座が無料となりますので、ご自身の興味に合わせて受講いただくことも可能です。また、卒業生・修了生及び教職員の方は半額以下で受講できますので、一人でも多くの方に「乃木坂スクール」のすばらしさを味わっていただきたいと思えます。

(大学院東京キャンパス 川端穂)



看護学科 ホストファミリー留学生の Tさんと過ごした日々

私は、四年前Tさんとホストファミリーとして出会いました。Tさんは端正な顔立ちで、どこか不安そうにうつむいていました。接していくうちに三十歳を過ぎてからの留学、国の情勢について不安があることが分かり、せめてここにいるうちは安心して勉学に励めるように後押しをしたいと思うようになりました。そして、Tさんは研究室に顔を出したり、自宅に遊びに来たりして私や家族とも馴染んでいきました。

一年生の時は、言葉の壁に悩まされ、「授業の時、先生の言葉が分からない」と涙する日もあり、私は、専門用語の解釈の仕方について共に学ぶつもりで学習を支援しました。一年生の春休み、Tさんは、日本の文化にも慣れ、心が落ち着いたら頃、自国の方と結婚しました。それから

ら二年後の春、コウノトリの恵みに預かり、昨年の一二月の末、玉のようなおとこの子を出産しました。

Tさんの母親は、娘のケアと孫の顔を早く見たいと願って出国手続きをしたのですが、国の事情によりやっつと二月の中旬にTさんのもとに来ることができました。その間私は、文化の違いに戸惑いながらも、ホストファミリーとして、人間としてできる限りのケアをするのが務めと思い、Tさんがマタニティブルーにならないように、側面からケアするのを楽しんでおりました。

三月に卒業式を終えて三人で帰国するまで、陰ながら後押しをして「日本での留学は本当に良かった。子どもは日本に留学させたい」と思ってくれた日があることを願いつつ日々を送っています。

「出会い」ということは、私の大好きなことばの一つです。いろいろな出会いで、人は成長し合えるものと思っております。若い二人から、そして二人を取りまくたくさんの方々からメッセージと示唆を頂き、私の固まりかかっていた脳細胞を柔らかくしていただきました。

この若い家族の幸せは、大田原市をはじめとして、国際医療福祉大学およびたくさんの先生方や国際医療福祉大学病院のあたたかい配慮以外の何ものでもないと感じております。

Tさんと共に過ごしたことで、私自身日本の文化の良さを再確認し、充実した日々を送ることができました。ホストファミリーとしてのチャンスを与えていただいたことに心から感謝しております。

(看護学科教授 坂主リツ)

看護学科長中西睦子教授が平成一九年度をもって大学院の専任となられるため、平成二〇年二月二七日(水)十三時三〇分から一五時三〇分、本学F一〇一講堂で特別講義が開催された。学生をはじめ教職員、病院や教育施設の来賓の方々など約四〇〇名の参加があった。

中西教授は講義に際して、「過去を振り返るといことは、いまをよりよくするためにふり返るのだ」と話された。そして、看護の過去を現場の特性から見ると、明治以降に絞るならば、五つの時代に区切ることができるとして講義を進められた。その中で、看護の未来についての重要課題として、看護の労働環境(物的環境より人的環境)の改善を挙げられた。また、講義の最後に「前向きで建設的な意見の言える人になってほしい」とメッセージを送られた。講義に参加した看護学科四年の蛭川京子さんからは花束の贈呈と共に「中西先生の講義は臨床に出て考えさせられることが多くあった。教えを受けた最後の卒業生として卒業できることを誇りに思う」との言葉が添えられた。

(看護学科講師 重久加代子)



看護学科長中西睦子教授 特別講義「看護の過去・いま・未来」開催

本学大学院の作業療法学分野責任者・保健医療学専攻主任を務められた鎌倉矩子教授が三月をもってご退任されました。わが国の作業療法法の臨床・研究のパイオニアであり、高次脳機能障害リハビリテーションの第一人者として、本学においても、七年にわたって学生たちの指導に当たってこられました。写真は三月七日、大学院学位記伝達式で挨拶に立たれた時のもので、自らの研究論文の執筆の体験に触れ、「自分のことばで書かれているか。それが、本当に自分が言いたいことか、と絶えず自問することが大切」と述べられた。

「鎌倉先生は、大学のことを知り尽くした最も大学の先生らしい先生でした。私が慣習に従わないで事を進めようとした時など、何度も鎌倉先生から注意を受けました。私が大学院長を無事に努めて来られたのも、鎌倉先生のご支援があったからです。心から感謝しています。」(開原成允大学院院長)

(東京事務所出版広報室 金井雅之)



武井雅昭港区長ご挨拶

第二回三田病院一般公開講座開催
二〇〇八年一月十九日、第二回一般公開講座が港区高輪区民センターで開催されました。今回は「緩和ケアの啓蒙」という港区からの要請を受けて企画したもので、港区共催、港区医師会後援のもと、「がん治療を支える緩和ケア」をメインテーマに掲げました。武井雅昭港区長、北島政樹院長のご挨拶後、消器センター太田恵

附属病院 国際医療福祉大学三田病院

第二回三田病院一般公開講座開催

二〇〇八年一月十九日、第二回一般公開講座が港区高輪区民センターで開催されました。今回は「緩和ケアの啓蒙」という港区からの要請を受けて企画したもので、港区共催、港区医師会後援のもと、「がん治療を支える緩和ケア」をメインテーマに掲げました。武井雅昭港区長、北島政樹院長のご挨拶後、消器センター太田恵

一朗教授が「三田病院の医療相談・支援・緩和ケアセンター」と題して、三田病院での取り組みを紹介しました。続いて、日本緩和医療学会常任理事で筑波メディカルセンター病院緩和医療科診療部長の志真泰夫先生が「地域を基盤とした緩和ケアをめざして」と題して、「緩和ケア」についてわかりやすく説明するとともに、日本での具体的な活動内容や代替医療などについて、現状を幅広く紹介しました。一般的には今後関心の高まっていくテーマであり、参加者は実際のがん患者様とご家族の他、医療関係者も多く、質疑応答では多くの具体的な質問が寄せられました。今後様々なテーマで定期的に開催し、患者様、地域の皆様に役に立つ医療情報を提供していきます。

院内研修会

◆医療安全研修会

テーマ 「患者さんと医療者自身の安全のために」～医療安全活動に楽しさを！～

演者 医療法人財団河北総合病院 院長 洲之内廣紀 先生

日時 二〇〇八年二月二十八日

◆保険委員会研修会

テーマ 「適正な保険診療にむけて (DPC・共同指導他)」

演者 帝京大学内科・東京都国保連 合会審査会研修委員長 藤森新 教授

日時 二〇〇八年三月四日 (総務企画課 杉田由紀)

- 「第一四回公開講座」開催
平成二〇〇八年二月二十四日(日)、熱海市観光会館において、「地域医療について考えてみませんか？」をテーマに第十四回公開講座を開催しました。
第一部「産科・小児科」
1. 産科医療の厳しい現状 林雅俊教授(産婦人科)
2. 妊娠糖尿病について 提坂敏昭教授(産婦人科)
3. 小児科診療の危機的現状 辻教敏教授(小児科)
4. 周産期からの育児支援 一虐待防止をめざして 板倉敬乃准教授(小児科)
第二部「糖尿病と栄養」
1. 増えつつける糖尿病 林洋教授(内科)
2. 糖尿病対策 正しい知識を身につけよう 山田佳彦准教授(内科)
3. 食事でのやる！糖尿病の予防と治療 楠本円裕管理栄養士(栄養室)
今回初めて講演を二部構成とし、第一部は、お子様を持つ方・出産を控えた方を対象とし、第二部は、従来通り高齢者を対象としました。当日は天候にも恵まれ、約二〇〇名の市民の皆様が来場されました。従来は高齢者向けの講演を行なっていたため、若い世代の方々にお集ま

附属病院 国際医療福祉大学熱海病院

「第一四回公開講座」開催

平成二〇〇八年二月二十四日(日)、熱海市観光会館において、「地域医療について考えてみませんか？」をテーマに第十四回公開講座を開催しました。

- 第一部「産科・小児科」
1. 産科医療の厳しい現状 林雅俊教授(産婦人科)
2. 妊娠糖尿病について 提坂敏昭教授(産婦人科)
3. 小児科診療の危機的現状 辻教敏教授(小児科)
4. 周産期からの育児支援 一虐待防止をめざして 板倉敬乃准教授(小児科)

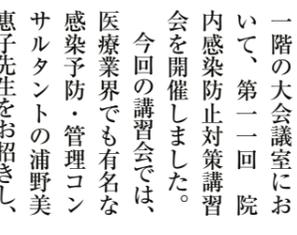
第二部「糖尿病と栄養」

1. 増えつつける糖尿病 林洋教授(内科)
2. 糖尿病対策 正しい知識を身につけよう 山田佳彦准教授(内科)

3. 食事でのやる！糖尿病の予防と治療 楠本円裕管理栄養士(栄養室)

今回初めて講演を二部構成とし、第一部は、お子様を持つ方・出産を控えた方を対象とし、第二部は、従来通り高齢者を対象としました。当日は天候にも恵まれ、約二〇〇名の市民の皆様が来場されました。従来は高齢者向けの講演を行なっていたため、若い世代の方々にお集ま

「院内感染防止対策講習会」開催
平成二〇〇八年二月二十七日(水)、当院地下一階の大会議室において、第一回 院内感染防止対策講習会を開催しました。今回の講習会では、医療業界でも有名な感染予防・管理コンサルタントの浦野美恵子先生をお招きし、院内感染対策の考え方について講義していただきました。当院からは職員約七〇名が参加し、活発な意見交換が行なわれました。



「エビデンスに基づく病院感染対策の考え方」
1. CDC推奨の標準予防策と感染経路別予防策について
2. カテーテル関連(尿路感染)対策について (総務課 篠原拓真)

施設インフォメーション

附属病院

国際医療福祉大学病院

第五二回「症例検討会」開催

国際医療福祉大学病院では、臨床研修委員会の主催により「症例検討会」を毎月最終月曜日に開催しております。今回レポートする第五二回「症例検討会」(平成二〇〇八年一月二十八日十八時から)は、回を重ねてきたこれまでの「症例検討会」の中でも、ひととき特別なものとなりました。今回は初回の試みとして、地域医療連携室とジョイントし、地元医師会の先生方をご招待しました。当日は、職員も含め総勢七〇名の参加となりました。



発表症例は
一、CPC「二一年の経過で死亡した筋萎縮性側索硬化症(ALS)の一例」
臨床研修医 山田智子先生
齋藤龍史先生
小川朋子先生
橋本律夫先生
加藤宏之先生



「非常にレベルの高い症例検討会であり、有意義だった」との評価もいただきました。今後も地元医師会の先生方との連携を深めるために、継続して開催して行く予定です。(人事総務課 石崎和彦)

発表症例は
一、CPC「二一年の経過で死亡した筋萎縮性側索硬化症(ALS)の一例」
臨床研修医 山田智子先生
齋藤龍史先生
小川朋子先生
橋本律夫先生
加藤宏之先生

「非常にレベルの高い症例検討会であり、有意義だった」との評価もいただきました。今後も地元医師会の先生方との連携を深めるために、継続して開催して行く予定です。(人事総務課 石崎和彦)

病理 齋藤 建先生
二、「肺癌との鑑別が困難であった縦隔原発悪性リンパ腫の一例」
呼吸器外科 齊藤紀子先生
山本達生先生
村山史雄先生

三、「複雑病変を有する下肢閉塞性動脈硬化症に対するハイブリッド手術の一例」
初期研修医 駒澤大吾先生
村上厚文先生
加藤盛人先生

四、「学校心臓検診について」
小児科 嶋岡 鋼先生
早瀬朋美先生
飯田和美先生
小宮山真美先生
田中吾朗先生
江口光興先生
野崎靖之先生

中学生以降、下手ながらも常に何らかのスポーツに凝り、現在ではもっぱら市民ランナーとしてマラソンに励んでいる。三〇代の頃は結構本格的で、北海道のサロマ湖で開催される一〇〇kmマラソンにも何度か挑戦した。先日開催された「東京マラソン」では、報道によると、三万二〇〇〇人のランナーが大都市東京を駆け抜けたようだ。参加申し込み者総数は一五六〇〇〇人を超え、なんと五倍近い抽選を経て参加できたランナー達は、さぞ爽快な思いで走れたことだろう。かく言う私も抽選で参加を許された一人。年齢を重ねる毎にせり出す腹部を憂いつつ、週末は多摩川の手でジョギングし、体調を整えてきた。昨年の大会は寒い雨の大会だったので、今回参加にあたり、長袖のシャツ、ロングタイツ、薄手のウインドブレーカーとすべてを新調し、その日待っていた。ところが、大会四日前の早朝、田舎の祖母が他界。途中で「友引」を挟む層の関係上、大会開催前日までに東京に戻ることは無理となってしまった。抽選に外れ、出たくとも出られないランナーに申し訳なく思いつつ、来年の抽選に賭けることにした。巷では、大会に対する賛否や意見もよく耳にするが、理学療法士の資格を持つ一人のランナーとして感じたことを少し。この大会は、フルマラソンの制限時間が七時間という初心者に優しい大会である。制限時間が長い大会には、鹿児島で開催される「いぶすき菜の花マラソン」、大阪の「淀川市民マラソン」(どちらも八時間)等があるが、大都市の主要道路を閉鎖してまで

私の主張 第8回 「東京マラソン」で思ったこと
理学療法学科准教授 終幸伸
行われる大会は唯一であろう。現在、各地で開催されている大会では、制限時間が六時間のものが多いようだ。この一時間の差は大きく、マラソン初心者の参加を促す効果は十分である。七時間と言えは半分走って半分歩いて間に合う時間。今回の完走率は九七・四%もあった。多数の運営スタッフと二万二〇〇〇人のボランティアに支えられ、大きなトラブル無く運営されたこの大会は、安全な市民マラソンとの好印象を残した。一方、マラソンブームの波に乗り、昨今のランニング用品の技術進歩には目を見張るものがある。専門店に行けば、目標タイム毎に推奨される靴が並べられ、私のように中高・ハイアーチの足にも適したものがすぐに見つかる。初心者ランナーに多い膝の傷害も、靴底から足部の動きを制御することで軽減されているようだ。今回購入したランニング用のロングタイツは何本もの筋サポートベルトが縫い込まれた代物で、あの下着メーカーのワコール製のものである。シャツは速乾素材、ウインドブレーカーは下に着けたセツケンが透けて見えるもの。多くのリサーチと長時間の研究のもとに、これらの商品は開発されていることだろう。走ることにパフォーマンスやそれによるスポーツ障害は、我々理学療法士が得意とする分野であるはずだが、このような研究に関与していることをあまり耳にしない。健康・スポーツ産業も予防医療の一つとして捉え、我々も深く関わらなければならぬ分野である。三月には、学生たちと「小田原尊徳マラソン」に参加しました。(八ページへ)

臨床医学研究センター(東京地区)

山王病院

人間ドックのお食事をリニューアル
 当院では本年二月より、人間ドック泊時のお食事をリニューアルしました。基本コンセプトとして「季節の食材をふんだんに取り入れ、四季の香りと栄養バランスがとれたメニュー」を指向しています。また、新たに、「お献立の「メニュー表」と「お食事オーダー表」を作成し、事前オーダー制で、ドックご受診の方からお食事のご希望を承っています。具体的には以下の内容としています。

●ご昼食

現在の「和食メニュー」「洋食メニュー」に「軽食メニュー四種」を追加し、お食事メニューの選択肢を広げました。



洋食メニュー

●ご夕食

新たに、低塩分・低脂肪・低コレステロールの「ヘルシー和食」「ヘルシー洋食」を追加しました。また、従来の「一般和食」「一般洋食」もメニューの見直しを実施し、基本コンセプトに従って、「四季の香り」と栄養バランスを実現しています。



ヘルシー和食

和食は三ヶ月毎に春夏秋冬メニューを作成し、洋食も六ヶ月毎にメニューを改定します。これにより、「一般食二種」「ヘルシー食二種」に「軽食」を加えた計五種類のメニューからの選択が可能となり、受診される方の健診データに合わせたお食事の提供が可能となりました。

実際に食事をご希望の方からのヒヤリングでも、皆様から喜ばれ、ご好評をいただいています。

最後に、今般お力添えをいただいた、医師・調理師・栄養士・保健師、そして事務の方々に厚く御礼申し上げます。
 (予防医学センター)

臨床医学研究センター(千葉地区)

化学療法研究所附属病院

最新の内視鏡外科手術用統合システム

ORR-1を設置した専用手術室が完成。近年低侵襲の手術として内視鏡外科手術が広く普及しており、近い将来、一般消化器外科領域では、ほとんど内視鏡外科手術になると思われるほどである。当院は消化器・呼吸器分野で内視鏡手術を積極的に進めており、千葉県下のリーダーとしてのみならず、日本および世界の内視鏡外科医の育成に努めるべく、最先端の設備を整え、高度な医療の提供を行っていく。

今回、ストルツ社製内視鏡外科用統合システムORR-1を設置した内視鏡外科専用ルームが完成した。このシステムは、従来のORR-1をハイビジョンアップし、ハイビジョン画像により繊細な画像が観察される。また、他施設にはない、独自の手術報告書作成システムを開発した。手術中の画像を取り込んだ手術報告書を作成し、これをファイリングする機能を搭載。現在、日本各地の内視鏡外科専用ルームの中では、最高のシステムである。



- システムの概要は以下の通り。
- ①手術用ハイビジョンモニターの吊下げ・三台
 - ②壁に固定されたプラズマモニター・一台
 - ③外回り撮影用カメラ(光源・ビデオプロセッサ・気腹器・排煙システムとハーモニックスカルペルの一式を小型カートに設置)

- ④手術動画の記録(HD、DVD)
 - ⑤手術画像と手術報告書のファイリング(静止画)とプリントアウト
 - ⑥手術室の画像の転送と閲覧(患者家族説明室、手術記録室)
 - ⑦手術記録室におけるビデオ編集システム
 こうした専用ルームによるメリットは、
 ①手術のための機器の煩雑な準備の必要が
 無くなり、より効
 率の良い手術件数
 の増加が見込まれ
 る ②集中管理に
 よる誤操作事故の
 防止、各科共通設
 備の使用により効
 率的な施設運用が
 できる ③ハイビジョンモニターを吊下げ
 ることで、より詳細な画像情報が得られる
 ④適切な位置にモニターを配置することに
 より、術者の手術時の疲労が少ない ⑤静
 止画像ファイリングシステムによる手術記
 録の作成が手術室内で容易にできる(外科
 医にとって大変なメリットである) ⑥会
 議室での画像供覧により学生・スタッフ・
 医師の教育を行う ⑦最新設備による宣伝
 効果 などである。
- また、今後専用ルームを使用して機器
 メーカーとの連携を強め、以下の事業計
 画を進めていく予定である。
- ①新製品の開発、評価を優先的に進める
 - ②開発、評価を行う会議への参加。使用メー
 カー主催の研究會、学会での講演協力
 - ③国内および海外ドクター、コメディカルの
 研修施設としての使用 ④海外病院との技
 術援助提携の橋渡し・援助・実技指導
- (消化器外科部長 山田英夫)



新宿げやき園

六月の開業にあたって

六月開設予定の「新宿げやき園」は、特別養護老人ホームと障害者支援施設からなり、ショートステイ、デイサービス、地域交流スペース等を併せ持つ施設として、新宿区民の方々の生活に溶け込んだ施設にしていきたいと願っています。施設が地元で役に立つには、機能に柔らかなさを持つことが大切で、



当施設の機能は、高齢の方々と身体に障害を持つ方々への法的に異なる二つのサービスに基づいていますが、これらの施設が一緒に設置されているメリットを最大限に生かしていきたいと考えています。

当グループでは「グループホーム青山」に次ぐ都内二番目の福祉施設です。近隣には、保育園・小学校・中学校があり、地域の子供達に開放することにより、「共に生きる社会」実現のための貴重な体験の場となることを期待しています。

また、職員のチームワーク力を高め、ご利用者・ご家族や一般住民の方々のご相談にいつでも対応できる確かな専門性を育むとともに、そうした方々の知恵を施設運営に活かすことのできる、柔らかな施設にしていきたいと念じています。
 (新宿げやき園開設準備室 平石守)

シーサイドももち

福岡地区の新プロジェクト

「シーサイドももち開発事業」

国際医療福祉大学・高邦会グループが、百道浜で進めているプロジェクト「シーサイドももち開発事業」の一部となる「福岡国際医療福祉学院」の新キャンパスがこのほど完成した。四月八日に、新キャンパスで初めての入学式が開催される。

同プロジェクトは、臨床医学研究センターの「福岡中央病院」や、専門学校「福岡国際医療福祉学院」など福岡市内に点在していた三施設を移転・集約し、病院・学校・福祉施設が一体となった地域医療の拠点作りを目指している。

建設地の敷地面積は約二万三千㎡。このほど完成した新キャンパスには、七階建ての校舎棟や三百名収容・四カ国語同時通訳可能な「ももち国際ホール」のある図書・会議室棟、一千名収容可能なももちアスリーナ(体育館棟)など、充実した学生生活を送るための配慮がなされた。また、今年夏頃のオープンをめどに福祉施設開設の準備も進められる。

また、同学院の臨床実習施設となる病院部分の建設も進んでおり、百道浜新病院開設準備委員会が発足し、委員長に国際医療福祉大学大学院の金出英夫教授が就任した。新病院のあり方などを検討し、地域との連携を深める目的で、地元財界やマスコミのトップの方々を委員とした諮問委員会も設立される。
 プロジェクト全体の竣工は平成二十二年春の見通し。(九州・広報 原田ちはる)

臨床医学研究センター(九州地区)

高木病院

小児科の三六五二四時間救急・診療

高木病院小児科では、二〇〇七年四月より、三六五二四時間救急・診療を開始しました。常勤六名を中心とした小児科医師が、新生児から思春期までの、一般的な小児診療と、夜間の小児救急を行っています。平日の時間内には小児神経、低身長、小児腎臓などの専門的な外来や予防接種、小児診療、夜尿相談などの専門的な外来や予防接種も実施しています。小児医療については、昨今、都市部と地方における医師の偏重から生じる医師不足、地域病院の小児科閉鎖などの問題がささやかれております。

当院の小児科は、このような問題に対し、先進的に取り組んでいる診療科として、地域の方々に評価いただき、福岡県南部および佐賀県南部地域のこどもたちの健康を守る不可欠な存在として、認識されつつあります。

また、週に一回の小児神経外来において診療を担当する国際医療福祉大学福岡リハビリテーション学部長・満留留久教授による、七回に及ぶ院内における健康教室の開催
 (今後の健康教

低身長(内分泌)をテーマに健康教室を開催

二〇〇八年三月一日(金)、当院にて、八回目の健康教室を開催しました。福岡大学小児科の廣瀬伸一教授をお迎えし、「低身長について」こどもの背が低いと思った時は「」をテーマに、約七〇名の方のご参加をいただきました。

この「低身長」とは、成長ホルモンの不足、ストレスの影響など、様々な要因により、こどもの成長に異常をきたす「成長障害」のひとつです。廣瀬伸一教授は本年一月より、当院で特別外来を開始しています。

この低身長の特別外来も、成長障害に悩む方々にとって、当院小児科が、良きアドバイザーであり治療者となるための重要な取り組みです。
 (総務課広報室 宮崎伸介)



廣瀬伸一教授による健康教室の様子

「医療福祉チャンネル774」おすすめの番組

医療福祉チャンネル774では、衛星放送スカパーフェクTV!774チャンネルで、医療・福祉・健康・介護に関する教育、教養、情報番組を放送!

国際医療福祉大学アワー

大学・大学院などの情報が満載

入学式や卒業式・運動会・大学祭などの行事、臨床実習や海外研修・国際活動、そしてクラブやサークルの紹介、先生方へのインタビューなど、大学・大学院・IHWグループの情報が満載の番組です。学生の皆様はもちろん、ご家族の方も是非お楽しみください。



平成19年度卒業式

黒岩祐治のメディカルレポート第47回 アガリクス報道

シリーズ「検証!医療報道の光と影」

シリーズ第1回は、一連のアガリクス報道。人への有効性や安全性の確認が不十分なまま起こったがん患者に対するアガリクスブーム。その後浮上したアガリクスに関する事件や問題を、メディアがどう伝え、何を残したのか。学問研究分野や医療現場への影響を考えます。



黒岩祐治氏 (本学客員教授) : 左

◆衛星放送スカパー! ◆インターネット

774視聴者特典として、次の番組を医療福祉eチャンネル (<http://www.ch774.com/>) で無料配信中! フリーダイヤル・Eメール (下記参照) で、お客さま係までご連絡ください。ユーザーID・パスワードをお知らせします。

ケアマネジャー受験講座2008

見て聞いて学べる講座

本講座の特長は、介護保険制度構築に関わった人、ケアマネジメントの第一線で活躍する人から直接学べることです。さらに、介護保険制度・関連制度の動向の徹底分析と過去10年間の過去問題の徹底分析から、出題傾向をズバリ予測します。(この番組のインターネット配信は、5月下旬からの予定です)



開原成允氏 (本学大学院院長)

こうなる!診療報酬改定2008 (全11回予定)

医療関係者 必見!

日本医療界の今後を左右する診療報酬改定のポイントを分かりやすく解説します。内容は、総論、ジェネリック医薬品、後期高齢者医療制度、診療所にとって改定の意味するもの、急性期病院、療養型病院、診療所と診療報酬点数などです。



武藤正樹氏 (本学大学院教授・三田病院副院長)

●医療福祉チャンネル774を見るには

- 「医療福祉チャンネル774」は衛星放送スカパーフェクTV!の774チャンネルでご視聴いただけます。ご視聴には、スカパーフェクTV!専用アンテナ&チューナーをお部屋のテレビにつなぐだけ!
- 視聴料・・・月額2,100円 (このほかに、スカパーフェクTV!加入料・・・2,940円(初回のみ)・スカパーフェクTV!月額基本料・・・410円がかかります)
- 法人契約・・・5,250円
- IUHW学生、マロニエ会会員、教育後援会会員の皆様は、特別視聴の制度があります。下記までお問い合わせください。

●視聴に関するお問い合わせは

フリーダイヤル 0120-870-774 ((株)医療福祉総合研究所 お客さま係) Eメール info@iryofukushi.com HP www.iryofukushi.com/

広報誌 IUHW 73号

発行：学校法人 国際医療福祉大学

〔大田原本校〕広報委員会
栃木県大田原市北金丸2600-1 ☎0287-24-3000

〔小田原キャンパス〕
神奈川県小田原市城山1-2-25 ☎0465-21-6500

〔大川キャンパス〕
福岡県大川市榎津137-1 ☎0944-89-2000

〔東京事務所〕出版広報室
東京都港区南青山1-24-1 ☎03-5775-2505

デザイン：iDept. 写真：米山真人ほか
編集：東京事務所出版広報室

©国際医療福祉大学 2008 Printed in Japan 禁無断転載・複写

お知らせ

IUHW Hot News

日本初の「子どもの村」福岡市西区今津に建設決定!

本学福岡リハビリテーション学部の満留昭久学部長が理事長を務めるNPO法人「子どもの村福岡」を設立する会(福岡市)が2009年の開村を目指している「子どもの村」の建設用地が福岡市西区今津の市有地に決定した。3月10日の「子どもの村福岡応援決起大会」で吉田宏福岡市長らにより発表、これに対し満留昭久学部長は「ようやく子どもの村の芽が出ました。これを大きな木に育てていくためにも市民の方からたくさんの方の支援をお願いしたい」と挨拶した。今後は、市有地約3,000㎡を有償で借り、子どもと育親が生活する住宅5軒を建設する。趣旨に賛同した九州電力など地元企業を中心に7社2団体が後援会を立ち上げ経済的支援を行っている。「子どもの村」は、虐待やネグレクトなど様々な事情で実親と暮らすことができない子どもを「育親」が共に暮らしながら支える場を作る日本初の取り組み。国際団体キンダールフ(オーストラリア)により、現在131カ国に400以上の村が設立されている。

「子どもの村福岡を設立する会」HP：<http://www.cv-f.org>

(九州・広報 原田ちはる)